



典子の生きかた

伊藤 整

新潮文庫

典子の生きかた



高校図書館用

新潮文庫 草88 B

昭和四十九年四月一日 発行

著者

伊藤 整

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(〇三)(二六〇)一一一
振替東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社にてお取替えいたします。

新 潮 文 庫

典子の生きかた

伊 藤 整 著

典子の生きかた

一

典子が入って行くと速雄は、寝たまま眼をぎろっと動かした。白眼のところが大きく見えた。眼の隅から、ずっと彼女の身体の動くとおりを追っている。射すくめられるように典子は段々身体を固くした。

きちっと、太い縞の銘仙の左前と右前の縞模様が平行にならぶように、坐った。呼びつけられたので来た、といった恰好である。ぶるっと、首の辺までで切つてある髪を、獣のようにゆすぶると、思い切つた形で首を伸ばして、速雄の方を見た。

その眼に逢うと、速雄は、眼なさしを真上に放つて、天井を眺めた。そして言った。

「家へ帰ってから来たの？」

すると典子は、速雄の眼に見えていない自分の唇の両端を下げて、怒つたような顔をした。眼もそういう眼つきになった。速雄の横顔は、蒼白い皮膚に三分ほど不精髭が伸びていた。

「ええ」と言った。

しかし、裁縫を習いに持って歩く包みは、すぐ襖のかげの廊下に、そっと置かれてあるのだ。わざわざ早目に切り上げて来たのだ。

「男が一人にいるところへ、君のような娘が度々来るのはいけないね」

だって、お見舞いにならないじゃないの。そういう言葉が自分の口の中で用意されている。自

分の性格が、娘という殻のすぐ内側で苦しがつてばたばたしているような気がするのだ。思い切り、こういう殻を吹きとばして、言いたいことを言い、したいことをする生きかたが、すぐ自分の手の届くところにあるような気がする。しかし、自分のまわりをぴしっと取り囲んでいるその殻からは出られそうもない。

そういう気持ちで典子は、じっと身体をかたくしている。速雄の枕もとには吸い飲みや、薬壺などを入れた盆に布巾をかけたのなどあった。どれも、彼が典子の家の中二階に寝ていたときに彼の枕もとにあったのそのままである。宿の主婦があまり構ってくれないらしく、盆にはうっすらと埃が見える。

「もう来ませんわ」と典子が言った。

今度は速雄がだまった。

「僕のいた室、今度は誰が使っているの？」と速雄が言った。静かな、やさしい響きであった。

「私の室になりましたの」

「そうか。そういうことになるんだらうな」

それを耳にしていると、典子は叔母のそのときの、ものの言いかたを思い浮かべた。

「典子さん。速雄さんのあけた中二階ねえ。あすこ、あんた使わない？ 日当りはいいし、表からは遠いから、落ちつくわよ」

典子は、その叔母に嬉しそうな顔を見せた。

「あら、私、ひとりで使ってもよくて？ 嬉しい。あんないいお室」

叔母は典子の顔を見ないようにしてそう言ったのだが、心から嬉しそうな典子の声を耳にする

と、ちらと眼をくれた。訝るような眼なざしが、皺に畳まれた眼のあたりに漂った。それを埋めて、人のいい笑いが叔母の顔に浮かんた。

「清子はやっぱり、今の三畳間がいいんだって」叔母はそう言った。

「私、すぐお机やなんか運ぼうかしら」

典子は茶の間の片隅に置いてある、小さな朱塗りの鏡台をのせた机を、速雄の室へ運ぶことをすぐ考えた。叔母の簞笥に入れてもらっている着物、小物を入れた行李などのことは思い浮かべなかった。速雄の室へ自分が移ることは、何故か当然だと思われた。下は工場の片隅なので、モータアの響きで絶えず揺れ動き、鋸の木を裂いてゆくきいんという音が朝早くから夕刻まで、夜業のある時は夜の九時まで絶えないのだが、そこは母屋から切りはなされた速雄の世界であった。その世界に、じっと坐り、夜は眠り、速雄の感じたものにとり巻かれて生きる、そのことを、すぐに典子は考えたのだ。そこは速雄の残して行った世界であった。

「だってお前、あすこの畳や襖なんか、リゾールでよく拭かないと、いけないよ」

叔母は、自分が安全な処に引き上げてしまうと、すぐ人のいい同情や世話やきの性を出すのであった。そのために自分の陰謀があかるみに出ることは気になかった。典子はまた、その叔母の気性を素直に受けとるように、自分を慣らしつけていた。それは、思い出せない子供の頃から、彼女の身についてしまっている孤児の弱さであった。

「あら、そうねえ」と、彼女は、ちよっと考える顔つきになり、すぐ表通りの薬店からリゾールを買って来ると、尻端折りをして、拭き掃除にかかった。その日は、裁縫は休んでしまい、午前中に、中二階へ自分の机を持って行った。清子が学校から戻って来ないうちに片づけてしまわな

ければならない、と典子は思い込んでいた。

ベニヤ板を張った白っぽい壁に、速雄がはずし忘れて行った小さな白樺の皮を張って作った山の景色の額があった。白い峰が遠景に浮き、小屋が手前の左の隅に半分見え、まばらな林が右手に連なっている。それを、典子は手を触れてならないもののように、そっとして置いた。動かしたり、誰かに喋ったりすれば、持って行かれそうで怖いのだ。

今も速雄にそのことを言おうと思った。だが、まるで自分の心に栓をつめたように、それが口に出ないのだ。

「あの室は、夜寒いだろう？」

速雄は上を向いたまま、眼だけを典子の方へ、ぎょろりと向けた。頬がこけて、顔が長く見える。もともと、長い大きな顔であった。

「ううん」と典子は頭を横に振った。また髪 of 厚く揃えた切り口がぶるんと揺れた。自分の襟の皮膚にちくりと刺さるのが感じられた。もっとその髪を伸ばそうとこの頃思っている。そうすると、ゆるいカールをかけられる。それを気にするせいか、頭を何かにつけて、ぶるると振る癖がこの頃典子についている。それは、自分を困らすうるさい考えをはらい除けるために必要な身振りのような気もする。

そうだ、私は嬉しいのだわ、速雄さんの中二階に入るのが。これ以外に、何を考える必要がある。叔母は、清子がその中二階へ行きたがるのを押さえようとしている。あんな病人のいた室。それに隙間風がひどいにちがいない。朝はゆっくり寝ていれないし。それに、叔母は典子を、茶の間から遠ざけたいのかも知れない。ああ、とそこで典子は自分の心に眼をつぶるように

命ずる。二十歳になったばかりの娘が、ぱっぱと元気よく銘仙のふだん着の裾をはねあげて、茶の間を歩けばいいんだわ、いじけないで、自分の家だというまっすぐの気持ちで。

そんな風に考えがうろつき出すと、またそこで典子はぶるんと頭を振り、顎を心持ち上げるようにして、宙に眼を浮かせるのである。

「私、帰ります」

「ああ、そう」

典子の眼にうつる速雄の頭の毛は動かない。そう言ってから、彼女は、一瞬立ちあがるのをのぼす。やっぱり速雄の髪の毛は動かない。ああ、もういい、と思いあきらめる。自分でも何を待っているのかわからないが、自分にどうしても無ければならないものが、ここにも湧かないのか、というはかなさが、ふっと典子の心に翳る。諦めるというほどはつきりした気持ちではない。いま感ずるもの足りなさは、幼いときから、慣れっこになっているものだ。清子が叔母に甘えるときのようなあるもの、暖いよりかかり合う気持ちに対して感ずる餓えなのだ。それをすぐ自分の願いのなかから追い出す癖が、今もやって来て、さっと典子を立ちあがらせた。

戸口まで出て、裁縫包みのなかから蜜柑を五つほどくるんだのを包装紙のまま、ぶらんぶらんさせながら、速雄の枕もとまで歩いて持って来た。速雄はまた見上げたが、熱でも出はじめているのか、瞼の上がぼっと赤らんで、典子の歩くのが頭に響く毎に眉のあいだに細いたて皺をよせる。それに気がついて典子は、爪先立ちになり、そっと包みを枕もとに置くと、

「さよなら」と言い、速雄が会釈するのは見まいとでもするように、くると向き直って室を出た。

以前とちがって、典子は茶の間に申しわけばかり坐って、叔母が火鉢の向うに落ちつきそうになると、中二階へ引き上げることもできるのだった。そして、自分の領地から出て来るように改めて茶の間に顔を出す。

二度目に出て来たとき、清子と茶の間で出逢った。

「どう？ 今度のお室。寒くない？」

「うん、すこし寒いけど、でもいいわ」

「中二階の方がよさそうね。行って見ようかな？」

「ええ」

清子は、室に入って、板壁の上に速雄の忘れて行った白樺の額を見つけると、

「これ速雄さんのね？」

「忘れて行ったのよ。私もらっちゃうの」

そのとき、清子は、隠していた内証ごとを言う眼つきになり、小声で、

「速雄さんの処へ行った？」と訊いた。

釣り出されたような気持ちで、

「うん」とうなずいた。

「そう」と清子は、自分が悪いように眼を伏せ、右足の白い足袋の尖で、畳のささくれを押さえた。そのままの恰好で言いつづけた。「元気？」

速雄さんはあんたの受持ちだけど、というようなその調子に、典子はなんとなく受け身になつて、

「わからないわ」

来るなど言われた、と相手に投げつけてやりたい言葉が口さきまでのぼって来たが、言ってしまったら、自分が悲しくなりそうであった。

「私も行って見ようかしら？」

「行ってあげるといいわ」

思わず典子の声が強くなった。その声には、自分の善意を示せる機会を掴んだ明るさが漲っていた。そういうとき、典子は自分で必要以上に気持ちになるのである。清子が行って見たいと思い、速雄も見舞いに行ったら喜ぶだろう。それはいい事なのだ。そう思う衝動のまま、自分のささやかな不快さなど、ぐいと傍へおしやって、叔母さんには黙っていてあげる、という、幼時から二人きりの内証事のときにして見せた顔になる。それでもう二人のあいだでは、げんまんのような確かさになってしまうのだ。

叔母に言わない世界が二人のあいだにあった。速雄の家は祖父の代に別れた長野県の本家で、やっぱり津田と言った。速雄の家では皆夭折して、祖母と彼と二人きりになった。高齡の祖母を、がらんとした大きな家に残し、津田家から私立大学の工科に通っていたが、父、母、兄弟たちを奪った病気が、また彼の内部に食い入ったのだ。清子の母の妙子は、それを極端に厭がり、速雄もまた室があつたら動きたいと言ひ出した。妙子が同じ町内に空いている室を見つけて来ると、速雄は、叔母（彼はこの家の当主の顕造とは又従兄弟になるのだが、年齢が違うため、典子の呼び方で、叔父、叔母と言っていた）に礼を言つて、寝台車で引越して行つた。速雄は二十四歳であるが、十四五から祖母と二人きりで暮して来たために、老成した気持ちと風貌になつて

いて、三十歳近くに見えるのである。家のものをすべて斃した結核がいよいよ自分にもとりついたと知ると、彼は深い覚悟でそれに向った。

一週間ほど肩が凝っていたが、外に異状はないのに、突然咯血した。すぐ彼は安静を守り、学校や祖母への気遣いという、外側へ自分を縛りつけていたあらゆるものを、放り出してしまった。もう一学期で卒業であったが、そんなことであくせくはしなかった。祖母には療養に必要なだけの金を送れとすぐ言ってやった。彼は、もう前から、その病気のやって来るのを待ちかまえていたという落ちついた顔で寝ていた。そして自分の肉体の強さを、ひそかに計画し、病気の進行の程度を推しはかっているように見えた。熱は徐々に下がり、血は止まったが、彼はますます真剣になっていった。いよいよ病気は油断のできない内部へ潜り込んだ、というような表情であった。

典子は、いつから速雄に兄に対するような気持ちになったかわからない。しかし津田家のなかでは、ともすれば速雄と典子の二人が団欒から取り残されて、片隅に顔を向き合わせるようになって、ことが多かったのであった。多分典子の父が若くて死んだというのも、速雄の家のもと同じような、結核に対する弱い体質のせいなのであろう。典子は割に賑やかな性分で、茶の間で家の者の話に加わっていることが多い。そこへお茶菓子が出されたりすると、平気でそれを食べている清子や叔母のあいだで、典子は何か言い出されるのを待つような顔をする。

「あら、食べないの？」と叔母が言う。

「だって、速雄さんもいるわよ」

「おや、そうだ。あの人出て来ないから当りが悪いのよ」

典子は勝手に、小皿に菓子分けて茶と一緒に速雄の室へ運んでゆく。

「ああ、置いて行つて」と、戸口の処に立っている典子をふりかえつて速雄が言う。その顔には、何か心配事に氣をとられている茫然とした表情が浮いている。彼の机には、本や雑誌が、あまり使わない製図用具などがあるきりなのだ。彼女は廊下から手を伸ばしてそれを敷居のすぐ内側に置き、勢いよく戸を閉めて戻る。

何だつてあの人は、何かもう一つ用があつて、表情をそつちに取られているような顔ばかりしているのだろう、と典子は、そういう時茶の間に戻りながら、ふつと考える。ところが、速雄が病氣になったら、それがはっきりと分つた。速雄がひとりで室にじつとしているときに、何へともなく向けていた不安な表情が、病氣になって寝てからは、とうとうそれに逢つたというような、一種の安堵と、いよいよ始まつたという必死の鋭さに変つてゐるのだ。

以前は、速雄の身のこなしについていたその不安が、変に典子を遠慮深くさせていた。自分の氣遣いが、速雄には必要だ。自分しかあの人の生活の隙間を埋めてやれる人間はいないのだ、と思う。それなのに、速雄と面とむかい合うと、じつと坐っているのも氣づまりになつて来る。

清子は、そういうところは平氣であつた。速雄の室に、ずかずか入つてゆき、本や雑誌を借りて来ては読んでゐる。

「私にもあとで読ませてね」と典子は、清子が読み出すと約束する。

「うん。でもこれ速雄さんの本よ」

「だからさ。いいでしょ」

清子は女学校の教科書をもつて、ときどき速雄に教わりにゆく。そういう従妹を見ると、ああ自分と似ているな、と典子は思うのだ。清子が心の動くままに素直に振舞つてゐるのを見る

と、自分もああいう風にするに違いないと思う。若しも……。だが、若しもという言葉のあとに続く条件は、ぼんやりとぼやけてしまう。

叔母は典子を、同じ区内の夜間の実科女学校へ入れた。典子の父は、死ぬ前に事業に失敗して、財産というほどのものを残さなかったから、典子の養育は全部叔父の負担になっている。その頃は、叔父の工場は、手を上げたばかりで、昼間は典子の受け持っている食事支度という仕事がかかりあったし、それに叔父の懐工合もよくはなかった。製品は安く見切って百貨店に渡すか、ストックしておいて小売の委託品の売れるのを待つほかなかった。工場を上げたのは失敗のように思われ、叔父は焦っていた。

だが、二年たって清子が小学校を出る時は、どうにか前途の見とおしがついていた。そのためか、清子は金のかかる私立の有名な女学校へ入れられた。典子は学校を終えると家の手伝いをしながら裁縫や生花を少しずつ習いに行けるようになった。しかし、自分には女学生の子供っぽい快活さのないのが、清子を見ているとよくわかるのだ。夜間女学校に來ているのは、みな忙しい時間を盗んで來ている会社の給仕だとか、寛大な家の女中だとか、昼間仕事を持っている少女ばかりであった。その少女たちにとっては学校は自分の世界でなかった。勤め先がすでにその少女たちを「教育」してしまっていた。自分の生活の眼が、てんでに出来あがっていた。その違いをまざまざと見せ合うようなものだ。教科書に書いてあることは、実社会へ入る前の段階なのでなく、ただ学科という符牒として覚えるのに過ぎなかった。その学校は洋服の裁断やミシンやタイプライターや算盤などに力を入れた。それが働いている少女たちには魅力のある学科であった。典子には、なかでも洋服の裁断やミシン掛けが面白かった。洋装が少女たちの間に流行して來

ていた。自分の生活に与えられる夢がそこにあった。子供の頃から、西洋流の童話やその挿絵で育てられた少女の着物、それから映画の女優がその物語の情緒と一緒に少女たちに与える美しい扮装への憧れ、そういうものが洋裁の時間に湧き立つのであった。それが典子の抱いているたった一つの夢であった。しかしそれも、毎日働かねばならないという習慣が身についている典子にとっては、そのまま自分の身を飾るという考えにはならず、そういう仕事で働いて生活できたら、という願いになっていた。

だが学校を終えると、叔母はすぐにも典子を嫁にやるつもりになっていた。それがたまたま厭であった。彼女は、今まで自分の思うように生きた日が無いような気がするのだ。今このまま嫁にやられては、他人のための生活が一つ終り、また新しい他人のための生活が一つ始まるだけのことのように思われる。

「私、洋裁をしてみたいと思っているんですけど」とあるとき典子は叔母に言った。

叔母は、おや、という風に、長火鉢の向うで、考える顔になった。それから、近年めっきり黒くしぼんで来た頬を、すうっと窪ませて長煙管を吸ってから、

「洋裁たってお前、自分で着るのかい？」

そのとき典子は、あっと自分の口に蓋をしたいほどであった。典子が毎日口に出さずに思いつめていたその願いの深さが、叔母に覺られてしまったのである。

「いいえ、ただそんな方面に働いて見たいと思ったただけなの。ちょっとそう思って見ただけなの」

そら見ろ、ここの生活に不満があるんだね、というむらむらとした腹立たしさが叔母の顔に現